高岡短期大学紀要　第19巻　平成16年3月
Bull. Takaoka National College, Vol.19, March 2004

中国語海外研修報告

岡　田　文之助*

目　次

はじめに

1、研修実施までの経緯
(1) 交流相手候補の調査（表1）
(2) 交流相手大学の選定
(3) 友好協力関係の締結
(4) 短期語学研修の実施　（表2、表3）

2、大外における研修
(1)「基礎」・「聴力」
(2)「文化講座」　（表4）
(3) 実践会話
(4) 単位の計算　（表5）

3、各地における見学
(1) 大連
(2) 瀋陽
(3) 北京　（表6）
(4) 見学先一覧　（表7）

4、渡航に伴う諸事項
(1) 移動　（表8～11）
(2) 研修宿舎　（表12）
(3) ホテルでの寝食
(4) 留意したこと
①全容の把握　②健康管理の徹底
③安全の確保　④人数の確認
⑤研修場所の開拓　⑥実地検分
⑦友好優先の交渉　⑧協力体制作り

おわりに

＊地域ビジネス学科

はじめに

高岡短期大学は2004年3月をもって国立短期大学としての歴史に幕を降ろすことになる。

第1期生を迎え入れてから僅か18年の間に、厳しい試練を受けながらも、地域の教育の発展に大きな足跡を残したと思われる。それをひとつの財産として後世に伝えるべく、記録しておく必要があると考える。

私は本学の国際交流事業のある一部分に関与したに過ぎないが、それについて書き記すことにした。まず、私が直接関わったことや間接的に見聞きしたことを順を追って書きとめておきたい。次に、私が全行程同行した3回の中国語海外研修を、授業科目・見学個所・渡航生活の面から振り返ってみたい。

この記録がいささかでも新生大学の国際交流事業の参考に資することが出来れば幸いである。

1．研修実施までの経緯

(1) 交流相手候補の調査（1996年）

◉ 1.10. 将来構想検討委員会－国際交流に関するワーキンググループ－（以下WG）が発足する。

◉ 1.26. 宮本匡章学長（以下「学長」）が、学生の中国留学の可能性・必要性等の状況を岡田に聴取する。

◉ 2.02. 学長が交流相手校の模索を指示する。

学長の指示を受けて、事務部及び岡田が、情報収集・事務交渉を開始する。

岡田が電話にて大連外国語学院（以下「大外」）・中央民族大学（以下「民大」）・北京工業大学（以下「工大」）・中央工芸美術大学（以下「美大」）に、往訪を申し出る。

◉ 2.08. 事務部長名義の往訪受諾依頼状を、大外・民大・工大・美大に発送する。

◉ 2.19. 学長名義の訪問日時通知を、大外・民大に発送する。

◉ 2.29.

～ 3.3. 高橋副学長・倉橋会計課長・岡田の3名が次の各大学を訪問し、先方と交流の可能性等について意見交換する。訪問者及び応対者は表1の通りである。

（表1）

訪問先	先方応対者	当方訪問者
大外	徐甲申副院長、他3名	一行3名
民大	郭兆林外事弁公室主任、他2名	一行3名
工大	栄華副院長、他3名	岡田
美大	張世川外事弁公室主任、他2名	岡田

工大・美大の訪問については、学長の差し止めが先方受諾後にあり、破約できず、岡田が本学の1教員の名義で果たすこととなる。

一行は併せて、大連・北京の交通や買い物等の生活環境及び名所旧跡を視察する。

(2) 交流相手大学の選定（1996 年）

◉ 3.19. 中国コースが大外との交流を希望する旨の要望書をＷＧに提出する。

◉ 5.20. ＷＧが「高岡短期大学における国際交流推進の方策について」をまとめる。

◉ 7.22. 学長が中国コース教官（磯部・山田・岡田）と懇談する。

◉ 7.25. 第１回国際交流推進専門委員会が開催され、岡田がオブザーバーとして出席する。

◉ 8.21. 岡田が電話にて、次の決定事項を大外に伝達する。

・大外で短期語学研修を実施したいこと。

・大外と協定書及び覚書（次項）を交したいこと。

・調印のため訪問したいこと。

(3) 友好協力関係の締結（1996 年）

◉ 9.03. 次の２案に部長名義の検討依頼状を添えて大外に発送する。

・「大連外国語学院と高岡短期大学との友好協力関係に関する協定書（案）」

・「高岡短期大学学生の大連外国語学院における短期語学研修事業に関する覚書（案）」

後日、前掲２案の中国語訳文を大外に発送する。

◉10.07. 学長一行の調印訪問日程（案）・学生の短期語学研修（案）を大外に発送する。

「高岡短期大学における国際交流について（案）」を富山県及び高岡市に送付する。

◉11.16.

～ 11.20.学長・松田事業課長・岡田の３名が北京・大連を訪問する。

北京で、学生見学予定地の天壇・万里の長城・頤和園・故宮博物院・北海公園・孔廟を視察する。

大外で、学長が中沖県知事の親書を汪院長に手交し、「大連外国語学院と高岡短期大学との友好協力関係に関する協定書」・「高岡短期大学学生の大連外国語学院における短期語学研修事業に関する覚書」に署名する。

大外側の出席者は、汪榕培院長等４名の教職員である。

調印式前後に、一行は留学生寮・食堂等を検分し、岡田は徐副院長に大連の自然環境・研修諸費用・カリキュラム等を確認する。

(4) 短期語学研修の実施

◉'96.12.03. 「第１回短期語学研修事業学生募集要項」を配布する。

（対象： 産業情報学科ビジネス外語専攻中国コース学生全員）

◉ 同 12.06. 大外における短期語学研修事業に関する説明会を開催する。

（対象： 語学研修参加希望者）

◉'97.01.17. 渡航手続き・日程等についての説明会を開催する。

（対象： 語学研修参加申し込み者のみ）

◉ 同 02.22.

～ 03.07. 第１回短期語学研修を大連・北京にて実施する。

以来、毎年実施するようになる。岡田が同行した各研修の期間及び研修者数は表２・表３の通りである。

（表２）

年	大連	北京	大連	日数
97	2.22.～	3.14.～ 3.17.		24
98	2.21.～	3.07.～ 3.10.		18
01	2.17.～	3.03.～	3.06.～ 3.07.	19

（表３）

年	中国コース 1年次生	中国コース 2年次生	造形各コース 1年次生	公開講座 受講者	計
97	13名	2名		2名	17名
98	15名				15名
01	14名		6名		20名

＊「中国コース」は、2001年には地域ビジネス学科「国際・中国語コース」に改名されている。

2．大外における研修

(1)「基礎」・「聴力」

「基礎」は文法の説明・語句の解釈を中心とした授業で、「聴力」は、聞き取り能力の向上を目指すヒアリングの授業である。両者は午前にセットされており、週当たり時間数は「基礎」28時間・「聴力」12時間で、３回とも同じ割合で行われた。

ただし、2001年に行われた造形学科の学生を対象にした入門クラスは、時間数が半分であったためか、授業は「基礎」のみであった。

授業は大外の教官が担当し、中国語のみで行われた。学生たちは教科書や教官のジェスチャーを手がかりにして、理解しようと懸命であった。私が授業参観して得た印象と学生の反応からみて、この直接教授法は、中国語学習を１年間経験した学生には大変効果のある強化トレーニングになったようであった。

(2)「文化講座」

「文化講座」は表４の示す内容であった。その中の太極拳・切り紙・楽器は、学外の専門家により講義された。また、徐副院長が担当した書道以外は、いずれも中国語で行われ、語学教育を兼ねた授業であった。

太極拳は、朝食前にセットされた３０分間の授業で、一連の体勢を教えてくれる。動作の模倣が中心なので、教官の説明を少し理解できる程度で成り立つ。また、風邪予防の観点から、この寒い時期に、模倣時間を少しでも長くとった方が良いとの判断により、引率者は、教官の強調点だけを通訳することに徹した。この反省から、1998年には動作図を、2001年には日本語の説明を付した動作図を事前に配布し、学生に予習させた。

料理は３回ともギョーザ作りで、食堂の食卓を適当に並べて行われた。学生にとって、

当地のレシピを知り、様々な包み方を教えてもらえたことは良い想い出になったであろう。ただ、引率者としては、ギョーザ作りを大学祭の模擬店ですでに体験している学生に、この機会に、中華包丁を握ったり炒め料理をしたりする体験もさせたいと思った。が、食堂の都合を考慮し、申し出ることはしなかった。

（表４）

97年	太極拳	料理	書道	切り紙
98年	太極拳	料理	書道	
01年	太極拳	料理	楽器	大連概況

(3) 実践会話

実践会話は、教室における講義と現場における指導で実施した。１回目の研修では、大外教官の授業が３週間と多く、研修生活に対応し得る講義も若干取り入れたようなので、引率者は現場での個別指導だけをした。

翌年から研修期間が２週間に短縮されたため、引率者が授業時間の不足分をこの実践会話で補充することとなった。1998年の研修では、講義を本学で２時間・大外で３時間行った。2001年の研修では、渡航前に５時間の講義を済ませ、中国滞在中は、講義内容を復習・予習させた上で現場指導のみを実施することにした。

実践会話の講義では、道を尋ねる・乗り物に乗る・買い物する・飲食する・交流する等の場に必要な言葉を取り上げ、学習させた。現場は、最初は市街・乗り物・銀行・商店・飲食店であったが、後には、映画館や公園などの娯楽施設・仕立屋・交流会・マッサージ店等までその範囲を広げた。

(4) 単位の計算

①教務委員会了承事項

98年よりの単位計算については、97年７月１日に行われた教務委員会では、「審議の結果、平日午後の実地研修を評価できるような授業計画であれば、４単位として認定しても良いのではないかとされた。」つまり、次のように算出することとなった。

午前４時間＋午後２時間×10［授業日数］

しかし、２週目の午後は、大方自由行動時間であった。それ故、表５の示す、実態に即した計算方法を採った。

②実際の計算方法

（表５）

	授　業	講 座	会 話	合計
97年	4時間×14＝56	4	0	60時間
98年	4時間×10＝40	8	12	60時間
01年	4時間×10＝40	10	10	60時間

③講座単位数の内訳

◉太極拳：　0.5時間 × 10 ＝ 5時間　　（97年は0とした）

◉料　理：　1.0時間 ×　1 ＝ 1時間

◉書道等：　各2.0時間 ×科目数

前記は、中国コース（国際・中国語コース）の学生を対象にしたクラスの講座単位数の内訳である。2001年の、造形学科学生を対象にしたクラスの単位数は、次のように計算した。

◉太極拳：　0.5時間 × 10　　＝　5時間

◉料理等：　1.0時間 ＋ 2時間× 2　　＝　5時間

◉基礎　：　2.0時間 ×　9　　＝ 18時間

◉会話　：　2.0時間 ×　3　　＝　6時間

計 33時間

④付帯条件

研修日記の提出を付帯条件として学生に課した。なお、2001年には、点数化しないが、「毎日語学ノート」の記入・提出を付帯条件に加えた。

3．各地における見学

(1) 大連

大連で見学したのは、主に名所の北大橋・老虎灘・棒捶島と経済開発区（対外的な工業団地）の開発管理公司・三越精工・イトキン・ＹＫＫである。

その内、大外主催の名所見学は予め研修日程に何個所か組み込まれていたが、実際に行く所については、毎回引率者の要望を聞き入れてくれた。経済開発区の見学は、引率者がJETRO大連事務所に斡旋・案内を依頼し、大外にバスと運転士を手配してもらい、実施することができた。

富山－大連便の開設に伴い、帰国の前日を慣れ親しんだ大連で過ごすことになった。その日の昼は、４班に分けてホームビジットした。見学・実地研修・交流を兼ねた最後の１コマと考えていた。が、こちらがホストに質問して引き止めなければ、食事を運ぶとすぐさま引き下がってしまう家庭もあった。所期の目的を達するためには、事前確認が必要であることを痛感した。

(2) 瀋陽

瀋陽見学は３回とも、大連滞在中に週末を利用して実施した。大外が企画する「週末小旅行」

に鞍山等のコースもあったが、地方の大都市である瀋陽を選んだ。国際化が進む大連や首都の北京と比較するのに格好の都市であるからである。そのため、旧跡の故宮・北陵だけでなく、98年・01年には、活気に満ちた太原街・中街も見学の対象とした。

(3) 北京

下記の表6は、北京における見学状況をまとめたものである。学生たちに古代歴史・伝統芸能・市民生活等、多方面にわたって中国を知ってもらうために、表中の見学先を企画の段階で旅行業者と相談しながら日程に組み入れた。

見学先中の故宮・天壇・頤和園・万里の長城は世界遺産である。また、王府井は最適な集合場所にもなり、自由行動の根拠地として選んだ。天安門広場は、開催中の全国人民代表大会の影響をまともに受け、部分的あるいは全面的に立入り禁止となった。が、めったに遭遇できない厳戒体制を体験するのも勉強になったであろう。

(表6)

	1日目	2日目	3日目
97	城楼、劇場	故宮、広場、景山	十三陵、長城
98	天壇、広場、城楼	故宮、北海、王府井、劇場	長城、頤和園
01	胡同、北海、景山、劇場	城楼、故宮、孔廟、秀水街	長城、頤和園、王府井

(4) 見学先一覧

(表7)

名称		メモ
1	北大橋	北九州と大連の姉妹締結記念として建てられた吊り橋。
2	老虎灘	山海に囲まれた風光明媚な砂浜で、岩礁、断崖が魅力的。
3	棒捶島海浜	環境が最も静寂な海浜公園で、園内に政府首脳の会議場がある。
4	開発管理公司	映像やデータで外国企業の開発区進出状況を教えてくれる会社。
5	三越精工	サンエツ金属(砺波)の海外現地法人で、精密部品を製造している。
6	イトキン	イトキンの海外生産拠点の1つで、婦人服等を生産している。
7	ＹＫＫ	富山県に親会社を持ち、最新設備でファスナーを生産している。
8	北陵公園	清の2代目皇帝の陵墓で、参道に石人・石獣が並んでいる。
9	瀋陽故宮	清の最初の皇居で、建物に満族文化の香りが色濃く残っている。
10	天安門広場	広さが40万㎡に及び、50万人を収容できる世界最大の広場。
11	天安門城楼	天安門上の物見櫓で、慶祝パレードの観閲台になっている。
12	故宮博物院	明・清代の皇居で、敷地72万㎡に60の金殿玉楼がある。
13	景山公園	海抜90mの山頂から故宮の美しい建造物が一望できる。
14	北海公園	遼以来の歴代皇帝の御苑で、美しい白塔が築山に聳え立つ。
15	頤和園	西太后が造営した御苑で、中国造園技術の粋を集めている。

16	天 壇	皇帝が五穀豊穣を祈った所で、建造物の芸術的価値が高い。
17	孔 廟	孔子を祀る廟で、境内に元以来の科挙合格者名簿の石碑がある。
18	十三陵	明代13人の皇帝の墓で、定陵だけが発掘・公開されている。
19	万里の長城	外敵を防ぐための城壁で、頂上からの眺めは素晴らしい。
20	胡同	北方の伝統的住居の間の通路で、庶民の生活ぶりが看取できる。
21	王府井	北京の銀座と言われる繁華街で、近くに庶民料理の屋台が並ぶ。
22	秀水街	絹物を売る店が密集する小路で、値引き交渉が楽しめる。
23	劇場	「天橋樂茶園」等のことで、中国伝統芸能が鑑賞できる。
24	大連市民宅	西崗区北海街にあるアパート式の妻帯者宿舎。

4．渡航に伴う諸事項

(1) 移動

①日中間（現地時間）

97年・98年の日中間の移動は、表8・表9の通り、関西空港と成田空港を経由したため、列車乗り継ぎの時間、集合待ち合わせの時間及び空港での搭乗手続きの空港逗留時間等で、総所要時間は長かった。

表10は富山－－大連便を利用した結果である。大連までの所要時間が大幅に短縮されて、国内移動に伴う繁雑さも軽減された。その上、費用も安くなり、大連を身近に感じるようになった。

（表8）

年月日	高岡駅(発)	関西空港	大連空港(着)	所要時間
'97、2、22	10:33	15:01～17:00	18:50	9時間20分
'98、2、21	10:45	15:31～17:00	18:50	9時間05分

（表9）

年月日	北京空港(発)	日本の空港	高岡駅(着)	所要時間
'97、3、17	9:20	13:30～14:45(成田)	21:09	10時間49分
'98、3、10	8:20	14:00～15:48(関西)	19:38	10時間18分

（表10）

年月日	富山空港	大連空港	所要時間
01、2、17	13:30 →→→	14:40	2時間10分
01、3、07	12:30 ←←←	9:20	2時間10分

②中国都市間

大連・北京間の移動は1時間飛行で、手続きも簡単であった。瀋陽へは、マイクロバスと特急列車のいずれを利用しても、大外から瀋陽のホテルまで約6時間かかった。

97年・98年の2回はバス利用であった。冬枯れの旷野と煩いエンジン音で、車窓を楽しむこともなく、車内は決して快適ではないのに、眠気に見舞われ、仮眠室状態であった。01年の列車利用の時は、学生たちはカード・ゲームに興じたり、同行した世話人（大外の日本語学部4年生）との談笑も弾み、学生同士の交流も活発で、みな生き生きしていた。その理由から、やはり列車利用の方が望ましいと思われる。

③各市内

宿泊地から代表的な目的地までの時間的距離を表１１にまとめた。

大外は市街に隣接し、どの繁華街も徒歩で行ける範囲内にある。学生たちは実践会話や日常生活の必要に応じて方々を歩き回っていた。

また、学生たちに自ら踏み入れて欲しい瀋陽と北京の繁華街は、ホテルから少し離れていて、自由行動時間が少ないため、２０分で移動できるタクシーを利用するしかなかった。

（表11）

都市	出発地	行先（バスでの所要時間）
大連	大外	空港（25分）　／　開発区　（１時間）
瀋陽	天城飯店	故宮（15分）　／　繁華街　（15分）
北京	前門飯店	空港（１時間）　／　万里の長城（２時間）

(2) 研修宿舎

①建物

研修宿舎は5階建てで、留学生と関係者（清掃・修理・守衛など）のみ立ち入ることができる。来客・部外者のためには待合フロアーが玄関近くにあり、その向いが守衛室で、複数の守衛が常駐している。同じ1階に院長室と事務室があり、地下1階に教職員や来客も利用できる食堂・売店・ラウンジがある。

②部屋

学生の泊まる各部屋に、スチーム暖房が入るが、部屋の向きにより、室温がかなり違う。そのため、南側の部屋の配分は引率者を悩ます問題の1つとなった。また、風邪予防のため、ルームメイトが協力し合って清掃、換気、湿度保持等を励行するといった指導の必要性を痛感する状況であった。

③食事

朝と昼は食堂を利用する人がほとんどであるが、間食や夕食は、外出して済ます人が多く、夕方の食堂は閑散としていた。食費は、3食食堂で取っても、1日平均20元（約300円）ほどであった。

④時間割り

学生たちは、表１２の通りに規則正しい毎日を送っていた。

平日の午前は授業のみであるが、午後は講座・見学・実地研修に当てられた。01年には、実地研修の場として、飲食店や各種商店の外に、引率者が新たに見つけ、下見した上で、青空市場や美容マッサージ店・仕立屋を加えた。休日は授業がなく、自由に過ごせるが、食事・入浴だけは時間厳守が要求された。

97年は研修が3月半ばまで続いたため、休み明けで帰校した大外日本語学部生が母国語を教え合う相手を求めに来た。本学の学生全員が1～3人の勉強相手となり、教室棟の明かりは毎晩点いていた。98年からは、時間的にこのような交流ができなくなった。

(表12)

7時	8	9	10	11	12	13	14時
太極拳	食事	授業		授業	食事	休憩	

14時	15	16	17	18	19	20	21時
講座	会話	他		食事	復習	入浴 他	就寝

夜は外出禁止で、テレビもない。学生たちは、その時間をどう過ごすかの問題に直面する。疲れを癒し・退屈さを紛らわす方法は他の部屋へ遊びに行くことになる。引率者の部屋が一番行きやすいようで、毎晩のように、何組かの学生が訪れ、会話も弾んだ。

(3) ホテルでの寝食

①瀋陽

97年、98年に利用したのは、古色蒼然としたホテルで、赤い絨緞が敷かれ、食事も豪勢であった。会議でそこを利用する中堅幹部たちには望外な宿であるが、設備の老朽化が進み、中国の若者にも敬遠されそうであった。

01年は、世話人がこの事情を酌んで、開業して間もない洋風のホテルを選んでくれた。バスルームは清潔で、テレビの映りが良く、ボーリング等の娯楽施設があったため、夜は退屈しなかった。食事は朝夕2食で、中華風料理であった。昼は外食で、特に故宮見学後の「老辺餃子館」(ギョーザの老舗) は学生に好評であった。

②北京

ホテルは旅の疲れを癒すのに最適であった。が、97年は、その快適さを十分利用できず、また、市内の名所も落ち着いて見学できず、気ぜわしい3泊になってしまう結果になり、残念に思った。その原因は、現地ガイドが見学の行く先々に「休憩」と称して1時間ほど土産店にとどま

る行程を組み入れていた。この反省から、98年・01年には、現地ガイドのサービス精神が損なわれない程度に減らしてもらうよう日本の旅行業者を通じて依頼した。

朝食は、いずれの年もホテルでバイキング料理を楽しむことができた。そのほかは高級レストランで取り、皆に好評だったのは、北京ダックと自由行動時に屋台で取った麺類等の庶民料理のみであった。

④大連

中国滞在の最終日に泊まったのは大連の中心街にあるホテルで、帰国前のひと時を過ごすのにはふさわしかった。

その日の昼食はホームビジット先で取り、夕食はホテル近くのレストランで取った。そのレストランは、商売気たっぷりで、不評を買った。室内は、壁一杯に売り物の掛け軸が掛けてあり、食事が終盤に入るころには、ウエトレスが長さ30センチの骨製の箸を10膳1組で売りに来た。学生たちがよほど「感じ悪い」ととったのか、声を張り上げて、正確な発音で「不要！」を連発した。

(4) 留意したこと

この海外語学研修は、本学の一事業として組織的に実施されている。引率者として、この事業を無事かつ円滑に成功させるために、特に下記のことに注意を払い、反省を加えつつ改善してきた。

①全容の把握

97年は、研修参加者全員の学習・寝食・安全・健康等の状況を把握し、いかなる事態にも対処する心構えを以て、研修アドバイザーの任に当たった。班長の献身的な協力もあって、研修の全容を概ね把握できた。大外授業の見学・発病者の世話（病院同行等）・治安状況の調査等に予想外に多くの時間がかかった。しかしながら、初めての事業という未知未踏に対する不安は相当解消できた。

98年・01年は、学生が受講する全ての講座に出席し、また、食事は毎回異なった学生と同席した。夕食後は、特別の用事がない限り、学生の来訪時間に備えて在室するようにした。これらのことにより、第1回に比べ、学生の状況をより良く把握できたと思う。

②健康管理の徹底

97年には、渡航前の説明会で、気候が北陸より寒く、それに対応し得る服装が必須であることを言ったのにとどまった。その結果、研修期間中において、発病者が延べ30名（風邪9・胃腸病13・疲労状態8）となった。症状と多発時期から、日本と異なる気温・湿度・食物と、それらによる偏食・暴食・ストレス・抵抗力低下等が病因であると推定した。

98年・01年は、事前説明会開催から、折にふれて前例を挙げながら注意を喚起し、次に列挙する予防策を周知させた。その甲斐あって、不調を訴える学生はかなり減り、病欠するほどの学生は2回とも3名以下になった。

◉規則正しく起居・飲食すること。

◉部屋の清掃と換気を励行し、湿度を保つよう工夫すること。

◉バランス良く栄養を摂取し、特にビタミンCを毎日摂るように心掛けること。
◉購入した果物・缶飲料は、飲食する前に水で皮・缶を洗浄すること。
◉菓子類は、デパート等ではきちんと包装したものを、露店・屋台では目の前で熱した物を購入すること。

③安全の確保

この研修事業は参加者全員の身の安全が第一の条件で成り立つ。しかし、社会制度も風俗習慣も日本と全く違う国に滞在しているのに、その相違に留意せず行動し、事故・事件に巻き込まれる例が後を絶たない。学生自身にその危険性を秘めているように見受けられるのを度々感じたので、下記の規程を作った。

◉滞在先の状況をよく知らず、意思伝達が十分にできる語学力を持っていないことを心得ること。
◉行く先々の法律・規則・風習を理解し遵守すること。
◉単独行動は学内に限定し、大連市内では二人以上で行動すること。
◉瀋陽・北京での自由行動はグループで行い、タクシーには男性が分乗すること。
◉集合・解散時間及び行動範囲を厳守すること。
◉買い物・乗車などでの支払いは、事前に費用を予想しておいて、その額に応じた金銭を用意しておくこと。

④人数の確認

税関の出入りや乗り物の乗降、見学先での移動等では、混雑の中での団体行動になる。目前の情景に見とれたり、何事かに手間取ったり、準備の怠慢で集合に遅れたりして皆からはぐれそうになった学生が、毎回のようにいた。

これらを憂慮して、団体行動の際には必ず先頭に立ち、人数を逐一チエックしてから、自分が最後尾につくようにした。また、移動時には常時再チエックした。取り越し苦労の嫌いもあるが、やはり、安全のためには念を入れた注意が必要であることを感じた。

⑤研修場所の開拓

実地研修場所を増やすことは、より多方面にわたって中国を知り、中国語を学ぶことにもなり、また、余暇を楽しむことによって、体調を整え、ストレスを解消するためにもなるので、適切な場所の探訪に歩き回った。

大連における学生たちの自由行動範囲は、97年では公園・繁華街・ファーストフード店等であったが、98年・01年では薬店・本屋・朝市・仕立屋・郵便局・映画館・CDショップ・カラオケ店・美容マッサージ店等で、かなり広がった。

瀋陽と北京での滞在は見学中心で、時間に制約があるため、自由行動場所を1つの繁華街に限定した。

⑥実地検分

研修場所や見学先は、学生たちに有益であるとの判断から選んだのである。が、学生たちが安全に自由行動して実りある見学ができるようにするためには、交通、風土、住民の反日感情等社

会環境を確認しなければならない。それ故、引率者は、機会を逃さず、出会う人々（世話人・通行人・露店商・タクシーの運転手等）との会話を通じて関連情報を入手し、多方面にわたって自分で実際に下見検分した。

その上で、学生に研修場所や見学先の予備知識を持たせ、物心両面から準備させた。

⑦友好優先の交渉

引率者は研修期間中において渉外係でもあった。

大外では、副院長をはじめ、事務職員・教員・世話人・運転手・守衛・食堂や売店の従業員等との交流・交渉は常時あり、それを等閑に付すことはできない。

友好交流は、その意志さえあれば、言葉が通じなくてもそれなりに可能であるが、「友好交渉」となると、三思した上で臨まなければならないと思った。しかし、実際、部屋の防寒対策、見学先の部分的変更、予定外のバスの手配、設備や備品の修繕、不始末の後処理等について相談を持ちかけると、素早く対応・善処してくれた。先方の誠意を信じ、非難も駆け引きもせずにすることにより、良い結果になった。

瀋陽では、同行する世話人に、ホテルに対する苦情の申し入れを依頼した。北京では、現地ガイドの「土産店巡り」行為にある程度の理解を示したためか、当方へのサービスに好意が感じられ、当方の要望を快く受け入れてくれた。

⑧協力体制作り

97年は2人の班長に、大連・瀋陽・北京での部屋割り、週末旅行・記念写真等の料金収集と、体調の良否、教材の不備、宿の不都合等の調査報告を依頼した。98年は男子学生の1人を班長にし、連絡・集金に加え、団体ビザの保管を頼んだ。部屋割り、健康調査等は女子学生に任せた。

01年は、造形学科の学生が6名参加で、学科別にせず、参加者全体を4班に分けた。しかし、渡航前の中国語学習歴によるクラス編成で授業が行われたため、授業以外の行動も学科単位で行われる場合が大半を占めた。混成班が班として実際に機能したのは、大連でのホームビジットのみとなった。

両学科生の融合を図る主要手段として、研修中の役割を細分化して、学生全員に分担させた。例えば、挨拶・通訳・連絡事項の伝達・部屋割り状況の調査・資料の配布・料金の収集・標語の抄録等々、大体2人1組で当たらせた。その結果、全員が交流しあうことになり、学科間の隔たりがなくなり、級友間の友情も自然に増進した。また、各人が役割を持つことにより、研修生活における全ての行動に責任感を持つことができたようであった。

なお、この各研修の一部行程に、本学事務官が2名同行した。研修環境の視察や副院長の表敬訪問といった公式行事をこなす傍ら、書類の保管、学生荷物の構内運搬、人数の確認、空港使用料の立て替えと動き、その上、撮影係・ガードマンの役と動いてくれた。事務官の支援の下、研修をより円滑に運ぶことができたと、毎回とも感謝している次第である。

おわりに

1996年は、WGの発足・副学長の中国訪問・大外との友好交流協定の締結・この短期語学研修事業の始動により、本学の国際交流元年と言えよう。前記報告は、私が関わったその一部分か

らのものである。この報告からの所感を列挙し、まとめに代えたい。

◉大連外国語学院における各講義は、中国語のみで行われた。学習途上の学生にとり全部は理解できぬものの、学習意欲を掻き立て、効果の大きいものであろう。
◉早朝太極拳は、心身ともの健康管理等の意味で掛け替えのない授業であろう。
◉経済開発区の見学は、日中関係を理解するための一助になろう。
◉当地の市民の生活に触れる実地研修は、中国理解をより深める切っ掛けとなったであろう。
◉伝統芸能鑑賞や代表的な中国料理の賞味も、異文化体験のため、日程に入れ続けるべきであると思う。
◉学生は役割を分担することにより、責任意識をもって研修生活を送ることができたと思う。
◉学生の安全・健康を第一に細心の注意を払わなければならない。
◉学生の研修日記は、研修成果を倍増させるものになろう。

しかし、本学の国際交流事業が目覚ましい成果を収め、更なる発展を遂げようとしている現状に対し、私の関わった部分を振り返ってみると、貧弱であり、所感も独り善がりかと反省する点もある。

最後に、より詳細なことについては、ＷＧや教務委員会等の議事録、事業課・学生課作成の各回『短期語学研修事業学生募集要項』、学生課保管の研修日記複写等を参照されることを望む。